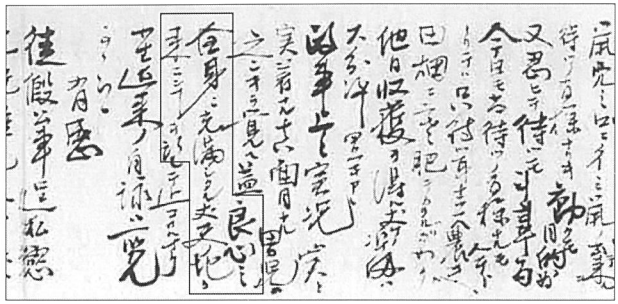

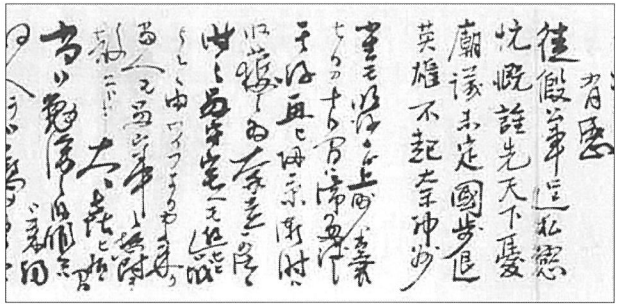

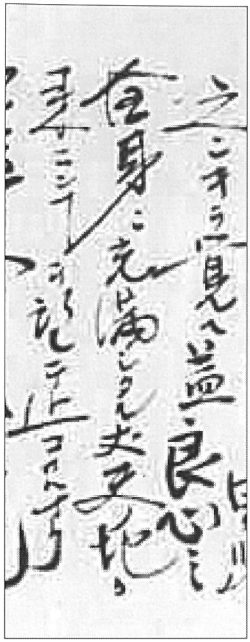

新島　襄の言葉

良心之全身ニ充満シタル丈夫（ますらお）ノ起リ来ラン事ヲ

吉村紀久子（元高等学校教諭）

「同志社は関西の慶応です。」と言われて京都へ来たものの、創立者が新島襄というだけしか知らなかった。

入社は講師経験のある男性教員と新卒の私だけだったので、給与説明の他これといったオリエンテーションは無かったが「良心の全身に充満したる丈夫の起り来らん事を」という新島の掛け軸の説明だけが印象に残った。ただ「丈夫」は「立派な男子」のことしか意味しないのかと反発を感じた。「女性が変われば世界がかわる」とどこかで聞きかじった言葉が頭をよぎり、「立派な女子」を――と、女子教育に力を入れようと思った。その後、女子体育の教員がどことなく軽んじられているような感じがして、本校の卒業生に教員として戻って来てもらいたいと願った。

ほんの一瞬のあの時の新島の言葉との出会いが、40年以上も私を力づけ、支えてくれた。たった一つしか新島の言葉を心に留めていない私でも、同志社はその働きの場を与えて、私を生かしてくれたのだ。

みなさんは、いつ、どんな時、どんな新島の言葉に出会えたのだろうか。